

多言語世界へのオマージュ

—風間伸次郎・山田怜央（編著）『28 言語で読む「星の王子さま」世界の言語を学ぶための言語学入門』

書評—

遠藤 史

Fubito ENDO

和歌山大学経済学部

1. 本書全体の構成と特色

本書はサン＝テグジュペリの小説『星の王子さま』（原書タイトルは *Le Petit Prince*）をテキストとして取り上げつつ、世界の諸言語を読者に親しみやすいスタイルで俯瞰する一冊である。詳しい書誌事項は次の通り：

風間伸次郎・山田怜央（編著）(2021). 『28 言語で読む「星の王子さま」 世界の言語を学ぶための言語学入門』. 東京：東京外国語大学出版会

原書は 1946 年にフランスで出版されて以来、現在までに数多くの言語に翻訳・出版され、日本はもちろん世界中の読者に愛されてきた。一見易しい文章で書かれていながら、随所にちりばめられた詩的な表現が醸し出す奥行きは深く、子どもにも大人にも読める普遍的な物語と言えようが、本書はこの小説に、文学の方向からではなく、言語学の方向からアプローチする。

本書の総ページ数は 537 ページで、「まえがき」に続く本文全体は大きく二部に分かれる。第 1 部は「言語学入門」(pp.13-78)と題され、言語学の基本的な考え方と用語を導入する。続く第 2 部(pp.79-523)は本書の主要部分を成しており、28 の言語の簡潔な概観に続いて、それぞれの言語で書かれた『星の王子さま』のテキストを示しつつ、各言語を紹介する。ページ数から見るように両者の分量は大きく違いますが、これは第 2 部で扱う言語数が多い上に、各言語のテキストを言語学的なスタイル（次節参照）で分析・紹介することによりかなりのスペースが要求されることによる。巻末には、28 言語での「こんにちは」「さようなら」の挨拶、そして 1 から 10 までの数詞が取り上げられている。

本書の全体的なねらいは、編著者による「まえがき」、特にその中の「この本で大事にしたこと」(pp.9-10)に示されている。その中から一般読者にとって有意義なメッセージを受け取るなら、言語同士の適切な位置づけに配慮しつつ、各言語の特色を尊重するということになるだろう。たとえば編著者は、「そこでなるべくこの本では、世界の言語全般からみてどうなのか、どの言語とどの言語が似ているのか、似ている場合は、なぜ似ているのか、似ていながら違う点はどこなのか、ということについても取り上げるように努めました」(p.9)と述べている。平易な述べ方をしているものの、言語類型論や対照言語学の視点を取り入れながら、各言語の類型的特徴に着目するという姿勢が窺われる。一方で編著者は、「28 もの言語の実際に触れると、どの言語もそれぞれ独自のしくみをもった、かけがえのない存在であることがわかつて思います」(p.10)とも述べる。この箇所直後に「世界に一つだけの花」という比喩があることからわかるように、それぞれの言語が独自の存在であって、「言語それ自体には何の優劣もないのです」(p.10)という、様々な言語の価値を平等に認める態度がここに現れている。

このような全体性と独自性との均衡は、この種のジャンルの書物において、意外に実現が難しい。取り上げる各言語の独自性を強く打ち出すほど、互いの位置づけが捉えにくくなるからだ。この難点を回避しようとする本書の工夫は、言語類型論の知見を第1部で積極的に紹介することで(次節参照)、第2部における各言語の提示に先立って、人類の言語に様々なタイプが存在することを読者に知らせておくことである。この試みは成功しているように思われる。一般読者は、まず本書を読んで世界の言語の特色と相互の位置づけを知り、その後各言語の概説へ、さらには各言語の専門的記述へと進んで行くことができるだろう。その意味で本書は、世界の言語を学ぶための格好の第一歩となる。

なお、本書で取り上げられた28の言語が編著者の勤務する東京外国語大学で教えられている「専攻語」であることは、やはり「まえがき」から知られる。その結果、名前は比較的知られていても、本書には登場してこない言語がある。たとえばヨーロッパではオランダ語や北欧の言語(スウェーデン語やフィンランド語)が登場しない。アフリカの言語(スワヒリ語など)や、著名な古典語(たとえばラテン語)も登場しない。だが、これは本書の価値を減じるものではない。むしろ将来の、本書に続く書物を強く期待させるものであろう。

2. 各部の特色

本書の各部(第1部と第2部)について、特徴的な点を取り上げよう。第1部「言語学入門」(全14章)を特徴づけるのは、その平易な語り口である。言語学は体系性を重視する傾向が強く、入門書でも見慣れぬ術語が次々に現れ、形式的な定義が続くようなスタイルが取られがちだ。これは学問的には正確かもしれないが、一般読者に必ずしも親しみやすいものではない。本書では、「言語学概論」のような講義なら終盤に紹介されることが

多い、言語の系統と歴史、比較言語学、世界の言語の地理的分布（地図付き）などのトピックから第1章を始め、具体的な言語名をまず提示することによって、早い段階での現実世界との結びつきを図っている。続く第2章では文字とその系統が提示される。文字に対する関心は一般に高いので、テキストを紹介するという本書の意図はあるとしても、読者には親しみやすい工夫である。

この後に「言語学概論」の主要部分が続く。音声学・音韻論が第3～4章、文法（形態論と統語論）が第6～11章で扱われる。音声学・音韻論の分野は、国際音声字母(IPA)を補助記号も含めて提示するなど（第3章）、詳細な内容に踏み込んでいるが、これは第2部において各言語のテキストの発音をIPAで示すためでもあろう。文法は形態論と統語論の内容を有機的に関連付け、20ページ強の長さで、形態的手法（第6章）から始まって情報構造（第10章）や複文（第11章）までの広い内容を要領よくまとめている。この第1部を読むことによって、言語学がどのような考え方をする学問分野なのか、読者ははっきりとしたイメージを持てるだろう。

この第1部では最新の理論言語学に触れることはないが、言語類型論的な視点（語順類型論、古典類型論）を早い段階（第5章）で取り上げることによって、一般化への視座は確保されている。穏健な理論的姿勢と言えよう。第13章「28言語の特徴」はその具体的な現れである。この章では、第2部で取り上げる諸言語の類型的特徴が音素、形態的手法、主な文法カテゴリー、そして語順の4項目に集約され、一覧表として提示されている。この表を観察すれば、第2部で登場する28言語が概ねどのようなタイプの言語なのか予想できる。いわゆる「言語マニア」も満足させるような内容である。最後の第14章では、本書の内容に関連した言語学の入門書・概説書等がコメント付きで紹介されており、リーディング・リストとして有用である。

続いて第2部に進んだ読者は、各言語の『星の王子さま』のテキストを読みつつ、ことばで世界を一周する。第2部で扱われる28言語の配列は次の通りである：前半は英語・ドイツ語・フランス語から出発し、ロマンス諸語、スラヴ諸語を経由して、アジアに至る。後半は中国語・朝鮮語・モンゴル語から始まり、ユーラシア大陸の南半分を反時計回りに進んで（東南アジア～インド亜大陸～中東）、チュルク諸語（トルコ語・ウズベク語）に至る。最後に登場するのは日本語である。

第2部の特色としてはやはり、28言語のテキストをリレーのように繋ぎながら、本書一冊で『星の王子さま』という小説全体を読み切ってしまうという構成の妙をあげておくべきだろう。たとえば第1章「英語」では『星の王子さま』の第1章が、第2章「ドイツ語」では第2章が取り上げられており（原書第26章だけは、前半が第26章「トルコ語」に、後半が第27章「ウズベク語」に分割されている）、たまたま原書が全27章で書かれていることも手伝って、第2部の各章はそれぞれに読みやすいまとまりを成している。副題にも銘打たれている通り、本書は「言語学入門」なのであるが、『星の王子さま』は全

体が一つながりの物語だから、つまみ食いの紹介では読者を満足させることは難しい。以上のような工夫をすることで、本書は『星の王子さま』全体を読んだという満足感を読者に与えることに成功している。

各章の冒頭ではその言語の特徴が簡潔に記述され、必要な場合は歴史的变化や社会的事情にも触れている。テキストが登場するのはその後だが、提示方法はテキストの前半と後半でやや異なる。前半は形態素分析とそれぞれの逐語訳（グロス）を伴った形が取られる。後半はこれが簡略になり、（形態素ではなく）単語ごとにグロスがつく形になる。なお、文全体の自然な日本語訳はどちらにも付けられているので、物語の筋を追うことは容易にできる。

前半でのテキストの提示方法は、言語学の文献で使われるような、かなり精密なものである。まず1行目に（翻訳された）原文、2行目にはその発音を示すIPA表記が示される。次いで3行目に単語ごとの音素表記と形態素分析、4行目に各要素のグロス、5行目に全体の日本語訳が示される。表記の一例を挙げる（スペイン語、p.153の2番目の文、3行目から4行目の先頭にかかる縦線は省略）：

Pero el principito agregó:

[pero el prinθípito agrégo]

pero el-ø princip-ito agreg-ó

しかし DEF-M 王子.M-DIM.M 加える-PST.3SG

しかし、小さな王子さまは言い足しました。

ハイフンは形態素の境界を示す。また、それぞれの形態素のグロスで、ラテン文字（大文字）で書かれた要素は文法的要素（たとえばMは男性、3SGは3人称単数など）である。なお、本書ではいわゆる屈折型の言語についても、可能な限り語幹と語尾を定める方針を取っている(p.83)。そのため、形態素に分離することが難しいスペイン語のような言語の動詞についても、ある程度「膠着型」の分析が可能となっている。また必要に応じてゼロ記号（上の例の定冠詞 el の分析参照）も採用し、言語体系への注意も促している。このように精密なグロスの助けにより、仮に読者がスペイン語を全く知らなくても、原文に触れ、ある程度の理解に至ることが可能となる。たとえば上の例を見るだけでも、スペイン語に名詞の性（ジェンダー）があり、その種類はごく少数であること、また定冠詞と名詞は性の一致を示し、主語と動詞は人称の一致を示すことなどが理解できる。こうして未知の言語を少しずつ「発見」していくことで、読者は知的な楽しみを得られるだろう。

ラテン文字で表記されない言語の場合（ロシア語、中国語、タイ語、ラオス語、ヒンディー語など）、表記は若干複雑である。まず本来の文字での（翻訳された）原文が示される。さらに音素表記と形態素分析の前の行で、もう一度本来の文字で単語を出す。アラビ

ア語やウルドゥー語のように本来の表記の方向が右から左に書かれる場合、単語のレベルで例外的に左から右に配列の方向を統一し（単語内での文字の配列は変えず）、しかるのちに音素表記と形態素分析を出す。このような工夫を重ねることで、ラテン文字で表記されない言語についても、読者は原文とその文字に直接当たることができる。

3. 本書の意義

「まえがき」に述べられているように、本書の出発点は 2016 年、東京外国語大学の学園祭の企画である(p.8)。この意味で、本書のターゲットの一つが東京外国語大学で各言語を専攻する学生たちであることは頷ける。では一般読者にとって、本書はどのような意義を持つのだろうか。それは疑いもなく、形も組み立ても様々な「外国語」に自ら触れる機会を持つことによって、未知の世界への知的好奇心を高めることであろう。日本における諸外国語の状況を考えるとき、この意義は重要である。

英語が「グローバル言語」としての存在感を高めるにつれ、英語以外の外国語についての社会的関心は低下してきている。大学教育に関しても、かつてはキャンパスの日常風景だった「第2外国語」の授業は縮小されてきている。予算やスタッフの事情もあろうが、一般的な問題として指摘できるのは、このままでは将来、大学教育を終えた人材の多くにとって、言語を通じた世界への扉が英語だけに限定されてしまうということだ。これは世界のイメージに一定の歪みをもたらしかねない。私たちはこの方向に進んでよいのだろうか。

英語の実用的価値はいったん認めるとして、英語以外の外国語については、その教養的価値を積極的に評価し、可能な限り多くの外国語に触れる機会を持つべきだと私は考える。これは専門家の養成とは異なる。そもそもどのような言語であれ、高度な習熟に至るには時間も努力も必要だ。しかし未知の言語に出会い、最初の二、三步を踏み出すことは誰にもできる。これは確実に教養を高めるうえ、新しい世界への扉を開く効果もある。一般読者にとって、本書はこのための格好のマテリアルとなるのではないだろうか。

本書の編著者の勤務する東京外国語大学で言語学・チェコ語を教授された千野栄一氏は『世界ことばの旅 地球上 80 言語カタログ』（研究社出版、1993 年）という本を読者に贈ってくれた。各言語の簡潔な解説と短い録音から成る本だったが、CD から流れる未知の言語の響きに当時、少なからぬ読者が魅せられたはずである。それはきっと、地球という多言語世界に捧げられたオマージュに感応していたに違いない。本書はその精神を継ぐものと言えよう。本書を読むことで、多くの読者が新しい世界への扉を見つけることが期待される。